

紅寿（こうじゅ）



写真：収穫期の紅寿

神奈川県は戦前から戦後にかけての石垣イチゴ栽培から、現在のハウス栽培に至るまで、伝統的な産地として位置付けられています。特に栽培面積の大半を占める作型は、ビニルハウスやプラスチックフィルムを展張した鉄骨ハウスで秋から春にかけて栽培されている促成栽培です。栽培されている品種は国や他県が育成した品種で、生産者から本県育成の新品種が待望されていました。

そこで、1979年に育種親として「秋香」（静岡農試育成）に花粉親の「麗紅」を交配し、約300株の交配実生から選抜して、早生で栽培特性や果実品質が優れる1系統を選抜し、1983年に育成を完了しました。品種は「紅寿」と命名され、1986年1月18日付けで品種登録第944号として公示されました。

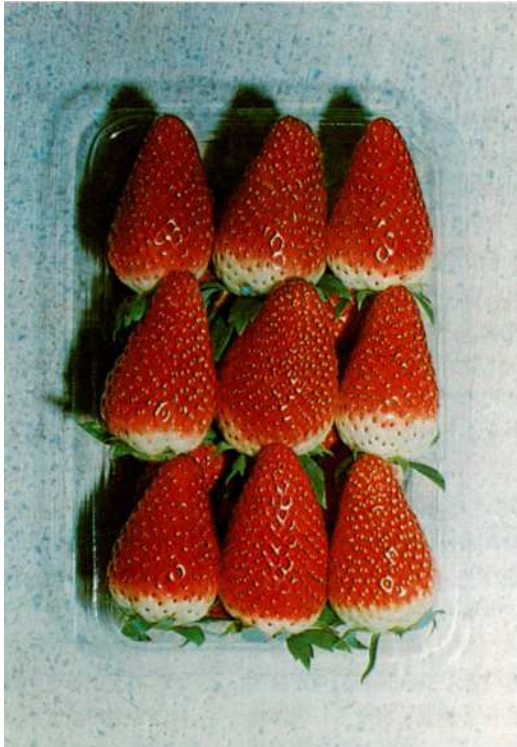


写真 2 : 「紅寿」の果実

品種の特徴は、果実が濃紅で、やや長い円筒形で果形が整っています。果肉は濃紅色で中心まで着色し、粘質で空洞はほとんどありません。糖度 (Brix%) は 11% くらいまで上昇することがあるが、普通 9% 前後で甘酸適度で食味良い品種です。果実の硬さは中程度であるが、12 月～3 月の期間ならば、6～7 日程度の日持ちが認められます。

栽培面の特徴は早生性があり、普通育苗でも 12 月上旬から収穫が可能です。また、草勢が強いので電照栽培は不要です。果房の発生は連続して中断することがなく、果実の肥大が良いので、摘果が不要です。